

Kobe-PRS 研修メンターとの面談記録

面談月	研修メンター押印欄	メモ	面談月	研修メンター押印欄	メモ
4月			10月		
5月			11月		
6月			12月		
7月			1月		
8月			2月		
9月			3月		

Kobe-PRS 研修部署名:調剤室・薬品管理室 研修目標:適切かつ安全な薬物治療が実施されるように調剤を行うことができる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
内服・外用・注射薬の処方監査・疑義照会	必要に応じてカルテから患者背景や病態等の情報を収集し、それらを考慮した上で、処方内容が適切であるかどうかを評価し、疑義照会を含め適切な処方提案ができる。	処方箋の基本的な記載事項が適切であるかどうかを判断し、不備があった際に疑義照会を行うことができる。	処方箋の基本的な記載事項が適切であるかどうかを判断することができる。
内服・外用・注射薬の処方箋に基づく調剤	—	一包化、錠剤の粉碎、剤形選択、配合変化の回避、安定性の確保等、工夫を必要とする調剤について、添付文書、インタビューフォーム、各種書籍等を用いて適切に判断し、調剤・監査を実施できる。	計数、計量調剤(散剤、水剤、外用剤)を内規に沿って正確に行うことができる。
調剤機器類(散薬分包機、一包化調剤機器、アンプルピッカー等)の操作および活用	採用薬の変更、処方頻度、処方数量、使用期限等を考慮して、アンプルピッカーに搭載する薬品を変更する等、調剤機器類の効率的な利活用ができる。	調剤機器類の基本操作に加え、日常生じるエラーについて対応できる。自身で対応不可能な際は、上司に指示を仰ぐことができる。	機器への薬品補充、ラベルや分包紙等の消耗品補充や交換、アンプルピッカーのカート交換等の各種調剤機器類の基本操作を行うことができる。
患者対応、情報提供・患者教育	—	患者から得た薬物治療に係る情報を適切に評価し、薬剤交付の検討や服薬指導を行うことができる。	患者に適切に対応し、該当患者に対して正しい薬剤を交付することができる。
医薬品の供給と管理	採用薬の変更、使用期限、緊急時に必要な薬剤か否か、不良在庫の回避等を考慮し、発注を含めた適切な在庫管理ができる。在庫不足時に、投与日や緊急度を考慮して急配等の対応を行うことができる。	在庫不足時に、投与日や緊急度を鑑みて急配するべきかどうかの判断ができる。	当院での発注から納品までの一連の流れについて理解し、医薬品の保管条件や使用期限等を考慮して供給管理ができる。
特別な注意を要する医薬品の取り扱い	—	劇薬・毒薬・麻薬・向精神薬および覚醒剤原料、特定生物由来製品等の管理(発注、補充、保管、廃棄、記録等)を行うことができる。麻薬事故の連絡を受けた際に適切な対応ができる。	劇薬・毒薬・麻薬・向精神薬および覚醒剤原料、特定生物由来製品等について、該当する薬剤を把握できる。それらの調剤時に必要な記帳等の手順を理解できる。

定数配置薬の管理	最新のエビデンスや処方頻度等を鑑みて、各部署における定数配置薬が適切であるかどうかの評価を行い、必要に応じて見直し等の提案ができる。	各部署の定数配置薬を把握し、それぞれの使用用途を理解した上で、補充等の業務を行うことができる。	定数配置薬使用時の補充方法を理解し、薬剤の取り揃えやカート等への補充を行うことができる。
----------	--	---	--

Kobe-PRS 研修部署名:製剤室 研修目標:製剤を適切に調製することができる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
院内製剤の調製	院内製剤の製造上の手続きおよび品質管理を適切に行うことができる。新規の院内製剤の必要性について、エビデンスを評価できる。	現行の院内製剤について、エビデンスを書籍等で調べることができる。	現行の院内製剤について、指導を受けて調製できる。
高カロリー輸液の調製	高カロリー輸液の配合変化・安定性を評価し、必要であれば医師に情報提供や処方提案を行うことができる。	高カロリー輸液の配合変化・安定性について、書籍・インタビューフォーム等で調べることができる。	指導を受けて無菌的混合操作を行い、高カロリー輸液を調製できる。

Kobe-PRS 研修部署名:薬品情報室 研修目標:医薬品の適正使用に係る医薬品情報の収集、評価、周知ができる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
医薬品情報の収集	PubMed、国内外のガイドライン等も含め、医薬品情報の評価に必要な情報源(二次資料・三次資料)を選択し、能動的かつ効率的に情報を収集することができる。	UpToDate や各種書籍も含め、医薬品情報の評価に必要な情報源から信頼性の高い情報を収集することができる。	基本的な情報源(PMDA サイト[添付文書、インタビューフォーム、RMP 等]、製薬企業サイト、各卸サイト)から情報を収集することができる。

医薬品情報の評価・加工・周知	評価した医薬品情報を、個別の患者の薬物療法に関する処方提案に活用することができる。	医薬品の基本的な情報について医療従事者に周知するための資料(DIニュース等)を作成できる。	添付文書やインタビューフォーム、RMPを基に、医薬品の基本的な情報を評価できる。
医薬品に関する安全性情報等の入手と活用	FDA等海外も含めた安全性情報を収集でき、また入手した安全性情報を基にリスク最小化のための対策を講じることができる。	安全性情報が発出された医薬品の院内における使用状況を把握し、病棟薬剤師や医師に対してDIニュース等を通じて当該安全性情報を周知できる。	PMDAからの安全性に関わる情報(安全性情報、緊急安全性情報・安全性速報等)や、製薬企業からの医薬品の適正使用等に関するお知らせを入手できる。
医薬品に関する質疑への対応	情報提供後の医薬品使用や患者転帰についてフォローアップできる。また定期的に質疑の内容を分析し、効率的かつ正確に回答するための資料を作成できる。	問題の解決に必要な情報を適切に整理・評価し、質問者の要望や緊急度に応じて回答できる。質疑と回答の内容、根拠資料等について他の薬剤師と共有するためにデータベースに記録できる。	医療従事者からの質疑を受け、質疑の詳細とその背景、および解決の緊急性を把握できる。特に質疑の背景にある質問者の直面している問題を確認し、個別患者における問題の場合は詳細な患者情報を取得できる。
医薬品採用時の評価・情報提供	新規医薬品の審査報告書やRMP、製薬企業のヒアリングを通して、臨床試験の情報、リスク、臨床的位置付け等について評価できる。医薬品によってはフォーミュラリーの作成や安全対策についても検討することができる。	新規医薬品の基礎情報について同効薬等従来品と比較し、他の医療従事者に説明するための資料を作成できる。	新規医薬品の適応、用法用量、禁忌、相互作用、薬物動態等、採用時の評価にあたり必要な基礎情報を収集できる。
医薬品の購入・供給	医薬品の供給停止や出荷調整時の対応について検討できる。	採用医薬品および患者限定医薬品の購入や供給の流れを理解できる。	—

Kobe-PRS 研修部署名:TDM室 研修目標:エビデンスに基づいたTDM・投与設計を行い、適切に処方提案できる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
薬物血中濃度に基づく投与設計・処方提案	最新のエビデンス等の情報を収集し、それらを吟味した上でスペシャルポピュレーションを含めた投与設計を行い、医師に処方提案できる。	腎機能低下患者における投与設計を行い、医師に処方提案できる。対象患者については抗菌薬血中濃度測定オーダー新規登録および注射オーダー仮登録ができる。	通常の患者における初期投与設計および得られた血中濃度の評価・維持投与設計を行い、医師に処方提案できる。薬物血中濃度測定法の違いについて理解できる。

Kobe-PRS 研修部署名:薬剤管理指導室 研修目標:病棟における薬学的管理を行うことができる

※各研修病棟において、研修開始前に1日病棟担当者に現在の研修進捗状況を報告し、研修計画を立案してください。

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
病棟における薬剤の適正管理	麻薬金庫内の麻薬の残数確認、救急カート/病棟配置薬の数量・期限チェック、病棟のインスリン管理状況の確認を行い、不備があれば改善策を提案し、実行できる。	麻薬金庫内の麻薬の残数確認、救急カート/病棟配置薬の数量・期限チェック、病棟のインスリン管理状況の確認を行い、不備があれば適切なスタッフに相談し解決できる。	麻薬金庫内の麻薬の残数確認、救急カート/病棟配置薬の数量・期限チェック、病棟のインスリン管理状況の確認を適切なタイミングで行うことができる。
初回面談	—	収集した情報について、アレルギー等対応が必要な項目があれば他職種と情報共有し、対応方法を提案できる。	把握すべき情報(アレルギー歴、副作用歴、OTC・サプリメントの有無等)を患者または患者家族から収集できる。
持参薬確認・服薬計画の提案	—	持参薬の内容について、患者の病態、既往歴、検査値、相互作用の観点から適切かどうか判断し、必要に応じて処方提案することができる。また、提案した薬物療法について、その内容を評価し再検討できる。	持参薬の内容、薬剤管理状況をもれなく確認し、鑑別報告書を作成することができる。休薬・中止、特別な対応の必要性について判断し、他職種と情報共有することができる。
ポリファーマシー対策	ポリファーマシー対策の必要性を処方医や患者に適切に説明し、処方提案することができる。	ポリファーマシーについて、薬剤部で定めたチェックリスト等に従って確認することができる。	潜在的に不適切な処方(PIMs)の代表例について説明できる。
薬歴情報収集、薬剤使用状況の把握	提案した薬物療法の妥当性について評価し、再検討できる。	薬歴に基づき、副作用の出現状況や検査値、バイタル、患者状況を確認し、より良い薬物療法を提案できる。	薬物療法管理システムを用いて、検査値や疾患に対して禁忌の薬剤や用法用量を変更すべき薬剤がないかをもれなくチェックすることができる。
使用薬剤に関する説明	患者の背景や価値観を考慮した上で、患者のアドヒアランスが向上するような説明・指導を適切に行うことができる。	患者の背景や価値観を考慮した上で患者に合わせた服薬指導(吸入指導を含む)を適切に行うことができる。	患者が使用している薬剤の処方意図・用法用量・起こりうる副作用について必要事項をもれなく説明できる。
副作用モニタリング	患者の訴えやバイタルサイン・検査データ等から、使用薬剤による副作用が出現している可能性が高い場合に、医師へ報告して対処方法を提案し、患者に対処法を指導できる。	患者の訴えやバイタルサイン・検査データ等から、使用薬剤による副作用が出現している可能性が高い場合に処方医への報告ができる。	使用薬剤による代表的な副作用(頻度が高いもの、頻度は低いが重大なもの)の出現がないか患者に聴取することができる。

薬剤管理指導記録の作成	薬剤管理指導を実施し、他職種が見ても指導内容が明確にわかる記録を作成し、指導から得た情報を基に他職種と協議できる。	薬剤管理指導(麻薬・ハイリスク薬含む)を実施し、他職種が見ても指導内容が明確にわかる記録の作成ができる。	薬剤管理指導料の算定要件を満たす指導を実施し適切な記録が作成できる。
処方の見直し(疑義照会を含む)	ガイドラインや文献を基に個々にあったエビデンスに沿った薬物療法を提案できる。	カルテの情報、患者の訴え、他職種の情報提供等から薬物療法における問題点を見つけ、処方提案を行うことができる。提案した内容についてのアウトカムを評価できる。	カルテからの情報収集や検査値の確認ができる。DI 収集、病態の把握等ができる。添付文書等を基に医師に適切な疑義照会を行い、その内容の記録を行うことができる。
処方内容の確認	今後の治療方針や検査予定等を把握し、先を見据えた処方であるかを判断できる。	継続指示や指示箋だけでなく、検査値やバイタル、病態も確認した上で処方が妥当か判断できる。	カルテ上の継続指示あるいは病棟の指示箋を見て処方内容に問題がないか確認出来る。
レジメンチェック	患者背景や病態を考慮した上で、患者に適したレジメンかどうかを判断できる。必要に応じて別のレジメンを提案することができる。	CP エディタ(基のレジメン)からの変更があれば、その妥当性を評価できる。	がん種に適したレジメンかどうかを判断できる。CP エディタ上の基のレジメンを参照し、内容に変更がないか確認できる。検査値、副作用発現状況により減量・延期・中止基準に該当しないかどうか判断できる。
ケモオリエンテーション・服薬指導・支持療法の設計	抗がん化学療法開始前から開始後に渡り、患者背景・病態等に合った副作用モニタリングおよび副作用軽減のための継続的な指導を実施できる。支持療法の評価を行い治療の見直しができる。	化学療法開始後に、化学療法の副作用をモニタリングし、副作用軽減のために継続的な指導を実施できる。必要に応じて支持療法の提案ができる。	化学療法の開始前に、患者へ適宜パンフレット等を用いて、説明・指導を行うことができる。支持療法薬の使用方法に関する知識を有し、列挙できる。
退院時処方の確認	—	かかりつけ医療機関の把握を含め退院時処方内容の妥当性を判断し、必要に応じて他職種に情報提供することができる。	入院後の処方内容や変更歴を確認し、退院時処方内容の妥当性を判断することができる。
退院時薬剤情報提供書の作成・退院時指導	退院時共同指導や退院支援カンファレンスに参加し他職種と情報共有を行う等、退院後の患者の生活を見据えた支援を行うことができる。必要に応じて退院時薬剤情報連携加算、薬剤総合評価調整加算(+薬剤調整加算)を算定することができる。	退院後に注意すべき事項について、患者の病態に応じて退院時指導を行うことができる。必要に応じてかかりつけ医療機関・かかりつけ薬局への情報提供を行うことができる。	退院時指導に必要な項目をまとめ、正しく退院時薬剤情報提供書を作成することができる。

Kobe-PRS 研修部署名:ICU 研修目標:重症患者の薬学的管理を行うことができる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
重症患者の薬学的評価	器官系統別評価を継続して行い、薬物治療を随時評価することができる。医療スタッフと協働し、最新の知見に基づき最適な薬物治療を提供することができる。	患者状態、投薬内容、検査値等を器官系統別に評価し、投薬内容の妥当性を検討することができる。必要に応じて医療スタッフに照会・提案することができる。	電子カルテや重症系システム、回診で得た情報等から患者状態、投薬内容を把握することができる。投薬内容の用量、相互作用等について評価することができる。
投薬ルートの管理	患者状態の変化を考慮し、ルートの必要性も含めて検討した上で、最適な投薬ルートを提案することができる。	ベッドサイドでの確認や重症系システムから投薬ルートを把握し、その妥当性を評価できる。必要に応じて看護師に投薬方法の変更を提案することができる。	注射薬の配合変化、内服薬の経管投与可否について医療スタッフからの相談に対応することができる。
薬学的ケア移行の実践	常用薬及び集中治療の中で開始された薬剤について、転棟後に必要な薬学的管理を検討し、適切にケア移行をすることができる。	緊急入院患者の常用薬を早期に把握し、中止または継続の必要性がある薬剤について患者病態に応じた投与設計を行うことができる。	緊急入院患者の常用薬を把握する手段を検討し、鑑別報告書を作成することができる。

Kobe-PRS 研修部署名:OPE 研修目標:術中・術後の薬学的管理を行うことができる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
周術期の薬学的管理	個々の術式・患者基礎疾患等を総合的に評価し、周術期の薬剤使用について医師と協議することができる。術中、術後に使用した薬剤の影響を評価し、ICU・病棟等に情報提供することができる。	個々の患者の周術期における薬学的問題点を挙げることができる。必要に応じて、医師、看護師、病棟薬剤師等に対し知見に基づいた提案をすることができる。	手術に使用する薬剤について基本的知識を有し、列挙できる。手術予定の患者の基本情報を電子カルテ等から収集することができる。

Kobe-PRS 研修部署名:通院治療室 研修目標:外来化学療法における薬学的管理を行うことができる

観点	レベル		
	3(理想的な薬剤師レベル)	2(研修終了時に期待されるレベル)	1(研修開始2週間程度かけて到達するレベル)
ケモオリエンテーション(外来化学療法の初服薬指導)	治療スケジュールや稀な副作用の説明の際に、患者から申し出があった際には、これから開始となる治療意義の説明や、患者の不安等表出に対する対応を、患者の心境を考慮しながら適切に実施することができる。	治療スケジュールや頻度の稀な副作用の説明に加えて、化学療法の副作用軽減のために必要となる服薬指導・生活指導を実施できる。	化学療法の開始前に、患者へパンフレット等を用いて、治療スケジュールや代表的な副作用(頻度が高いもの、頻度は低い重大なもの)等の説明を行うことができる。
副作用評価と支持療法の設計	副作用の評価および支持療法が適切であるかの評価を行い、支持療法を含めた治療全体(抗がん薬の投与量変更等を含む)について主治医と議論することができる。	各レジメンの副作用を列挙し、患者面談時にCTCAEグレード評価を行い、その評価を基に必要な応じて主治医に支持療法の提案ができる。	CTCAE グレード評価ができる。支持療法薬の使用方法に関する院内マニュアルに準じた知識を有し、列挙できる。
抗がん薬のミキシング	抗がん薬の曝露予防を行い、点滴開始時刻や通院治療室の混雑具合等も考慮した上で、適切な手順で抗がん薬の調製および監査を行うことができる。	抗がん薬の曝露予防を行い、処方頻度が低い抗がん薬も含め、効率よく調製できる。他者が調製した抗がん薬の監査ができる。	抗がん薬の曝露予防を行い、繁用される抗がん薬を適切に調製することができる。
外来がん薬物療法における病診薬連携	トレーシングレポート(薬局薬剤師によるテレフォンフォローアップの報告を含む)を基に患者への面談や医師への情報提供を行い、病院の対応について薬局薬剤師に情報提供できる。	患者背景を考慮して、薬局薬剤師にトレーシングレポート(薬局薬剤師によるテレフォンフォローアップの報告を含む)で報告していただくべき内容をレジメン説明書に明記することができる。	かかりつけ医療機関や薬局との病診薬連携ツールを適切に活用できる。患者に病診薬連携の必要性を説明できる。